

田辺市におけるひきこもり支援

(「ひきこもり」を支える
官民のヒューマンネットワーク)

平成 14 年 4 月 ~ 15 年 3 月

和歌山県田辺市

目 次

.「社会的ひきこもり」の定義	田辺市	1
.ひきこもり相談窓口支援の流れ（資料1）		1
相談実績（資料2）		
ひきこもりの背景を見極める		
社会的ひきこもりへの支援		
家族会の要綱（資料3）		
家族会の実績（資料4）		
デイケアの実績（資料4）		
居場所との連携		
訪問活動		
啓発活動・講演会実績（資料4）		
ひきこもり検討委員会の活動		
先進地視察（資料5）		
啓発講演会（資料6）		
.田辺市ひきこもり支援の体系（資料7）		3
ひきこもり相談窓口		
ひきこもり検討委員会（資料8・9）		
社会的ひきこもり青少年の居場所<ハートツリーハウス>		
.ひきこもり支援における今後の課題		3
国・県への実情報告と支援の要請・全国への発信		
人材の育成・予算の裏づけ・制度の創設		
行政内部の十分な連携		
関係分野（母子保健・学校保健）の業務の充実		

.ひきこもり支援をどうみるか	4
A.平成14年度ひきこもり検討委員会委員長（精神科医）から	

B.窓口担当者（保健師）から

.資料

資料1	ひきこもり相談窓口支援の流れ	6
資料2	相談実績	7
資料3	家族会の要綱	9
資料4	家族会・デイケア・啓発活動・講演会の実績	10
資料5	視察研修について（北海道方面） （平成14年度第4回ひきこもり検討小委員会提出資料）	11
資料6	講演会のまとめ（青少年就労フォーラム、不登校・ひきこもり） （平成14年度第5回ひきこもり検討小委員会提出資料）	18
資料7	田辺市ひきこもり支援の体系	41
資料8	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況	42
資料9	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会名簿	45

.参考資料

ひきこもり青少年の居場所に関する資料	47
不登校に関する居場所の資料	49

・「社会的ひきこもり」の定義

田辺市

6ヶ月以上自宅にひきこもって社会参加（就学・就労）をしない状態が続いており、精神障害や中等度以上の発達障害がその原因となっていないもの。（医学的概念ではなく、社会的概念である。）

・ひきこもり相談窓口支援の流れ（資料1）

相談実績（資料2）

相談には、家族からの相談と本人からの相談があるが、家族からの相談の場合、本人に家族が相談に行っていることを伝えられているかいないかによって、本人の動きに大きく影響する。家族が本人に伝えられている場合は、家庭内の空気にも変化が起こったり、本人が面接に来るようになり、デイケアや居場所につながったりしてくる。しかし伝えられていない場合は、家庭内に波風も立たない代わりに、膠着した状態が続き、本人の変化もみられにくい。面談の中では、水たまりに石を投げたときにように、それが大きな波紋になるのか小さな波紋になるのか分からないための家族の不安も理解できるが、投げないことには何ともならず、家族が本人に相談に来ていることを伝える努力をお願いしている。

ひきこもりの背景を見極める

相談の中で、最も重要なことは、ひきこもりの背景の見極めである。精神障害や発達障害が疑われる場合には、早期治療・療育につなぐため、適切な関係機関へ紹介している。

窓口では、社会的ひきこもりと思われる方への支援が、継続相談を通じて展開されていく。

社会的ひきこもりへの支援

家族会の要綱 (資料3)
家族会の実績 (資料4)
デイケアの実績 (資料4)
居場所との連携
訪問活動

継続相談の中で、パーソナリティーに起因するものとボーダーライン (HF PDD・ADHD・LD・経度MR)にある中で受動的なものについては、家族は、必要に応じて家族会 (H14.6月開設)へ紹介したり、本人の場合は、居場所 (H14.5月から準備)のほうへ紹介していった。しかし本人にとって面接後いきなり居場所というのは難しいことが多く、数人仲間を集めたうえで居場所へ移っていく方が無理がないと考えた。そこで、H14.12月から居場所の職員の協力を得て、デイケアを試験的に開始。このゆるやかなステップが本人らも活用しやすく、このステップで慣れてから居場所へとつながっていくという流れができてきた。デイケアにも出ていきにくい本人の所へは、居場所の職員と共に家庭訪問をすることも開始した。

相談の中で、対応が困難な事例については、家族や本人の了解を得て、ひきこもり検討委員会の中で検討したり、支援として、家族会・居場所・デイケア等の必要性についても、委員会の中で意見を求めながら進めてきた。

啓発活動・講演会実績 (資料4)

昨年視察でお世話になったタメ塾工藤氏との関係から、青少年就労フォーラムを、また、昨年もひきこもりの講演会で講師をお願いした斎藤氏に不登校・ひきこもりの講演会を、フォーラムと講演会ともにお二人が出演して下さることになり、当地域の不登校・ひきこもりや青少年に関することの理解を深める機会となった。

また担当者による講演会も関係者や関係機関に対して何回かもつ機会があった。田辺市の取組の現状や課題、ひきこもりの正しい理解と支援について伝える機会となり、今後もこのような地道な活動によってひきこもりにかかわって下さる支援者を一人でも多くしていくことが大切である。

ひきこもり検討委員会の活動

先進地視察（資料５）

啓発講演会（資料６）

北海道視察を通して、公的機関が「ひきこもり」に関わるときの姿勢、行政としての役割について考えてみる機会となり、５年１０年先のビジョンを掲げたものを築いていきたい。

・ 田辺市ひきこもり支援の体系（資料７）

ひきこもり相談窓口

ひきこもり検討委員会（資料８・９）

社会的ひきこもり青少年の居場所<ハートツリーハウス>

田辺市独自のひきこもり支援の中心が、ひきこもり相談窓口とひきこもり検討委員会の存在である。窓口の支援の流れと官民の領域を超えた人的な支援体制が、更に充実・整理されていかなければならない。窓口開設以来この２年間で整備されてきたひきこもり支援としての受け皿（社会資源）が、より充実されてその機能を十分に果たしていくことと、更に利用者の要求に合った選択肢が増えていくこと、支援の終着点を目指して官民の役割を明確にしていくことなどが今後の課題となる。

ボランティア団体で開所された社会的ひきこもり青少年の居場所<ハートツリーハウス>との連携も十分にとりながら、その発展のための支援についても考えていかなければならない。

・ ひきこもり支援における今後の課題

国・県への実情報告と支援の要請・全国への発信
（人材の育成・予算の裏づけ・制度の創設）

田辺市独自の支援策が進む中、相談には4割が周辺町村等の市外からである。住民にとって相談に行きやすい市町村単位での取組が発展していくためには、関係者の情熱やボランティア的意識だけでは限界もあり、早急に国・県レベルの制度の創設、予算的裏づけ、人材育成が必要となる。

田辺市の取組を全国に発信する機会を持つこと、県を通じて国へ、今後の政策に反映してもらえるような働きかけが必要となる。

行政内部の十分な連携

(関係分野<母子保健・学校保健>の業務の充実)

2年の相談活動を通じて気になっていることは、6～7割が不登校経験者であるということ。その中には幼い頃からの発達課題をもちながら、養育の問題にすりかえられて、本人・家族ともに傷ついている方がいることである。

母子保健・学校保健の予防的な取組、卒業後の継続的な支援がなされるような行政内の連携の充実が求められる。

・ひきこもり支援をどうみるか

A. 平成14年度ひきこもり検討委員会委員長(精神科医)から

今年度の検討委員会は視察や講演会を通して、今後のひきこもり対策をより具体化することに重点を置きました。要点は3つで、窓口の充実 家族会の立上げと自立 デイケア(日中の社会的な活動訓練)の開始です。

については、担当者の熱意と学習意欲、窓口の利用者中心の相談姿勢が窓口業務を既に一定のレベルに至らしめています。ひきこもり以外の事例についての見極めの力量も高まりつつあります。今後は、事例数の増加にどのように対応していくかが課題ですし、地域の医療機関との関係を密にし、診断をより速やかに確実に行う必要が生じるでしょう。その対策のひとつとして、来年度からは紀南総合病院新庄別館精神科医に検討委員会に参加していただくことになりました。

家族会の立上げと自立については、既に今年度始まっており定期的に開催

されています。現在は窓口担当者がまとめ役をする必要がありますが、1～2年かけて自助グループ化することを目指しています。

デイケアはハートツリーハウス（居場所）との共催で週一回行われています。今後多様なニーズを持つ窓口利用者のためにもデイケアが選択肢の一つとして確立される必要があります。

最後になりますが、検討委員会としては5年後、10年後のひきこもりに対する田辺市の取り組みが不透明であることに懸念を抱いていたのですが、平成15年度の発言とはなりましたが、担当課長が「ひきこもり窓口は永久に続けます」と明言していただいたことに感謝したいと思います。

宮本聡

B. 窓口担当者（保健師）から

窓口を開設して丸2年が経過した。振り返ってみると専用電話を設置し、窓口の担当者となり、継続相談の中からニーズをさぐり、そのニーズに合った社会資源として、居場所作りにボランティアとして関わり、行政内では、家族会の設立（これはいずれ自助グループとしていきたいが）居場所の職員の協力により、デイケア（これはH14年度からは居場所が主体）の開始と、受け皿の一つとして作られてきた。これも全て窓口を支え続けてくださる検討委員、あるいは関係者の方々の熱意あればこそである。行政が動き出した（動き出すにも住民の熱い要望があったわけだが）ことで、関係機関や関係者が互いの職域や役割を一步踏み出した活動につながり、そのことがひきこもりの支援には不可欠であり、これまでの支援体制を築いてくるのに広がりを持たせてきた。

当地方のヒューマンネットワークこそが市の財産であり、その中で行政のあり方、窓口のあり方について、改めて見つめなおし、支援体制の充実、新たな構築のために、全力投球していきたいと思っている。

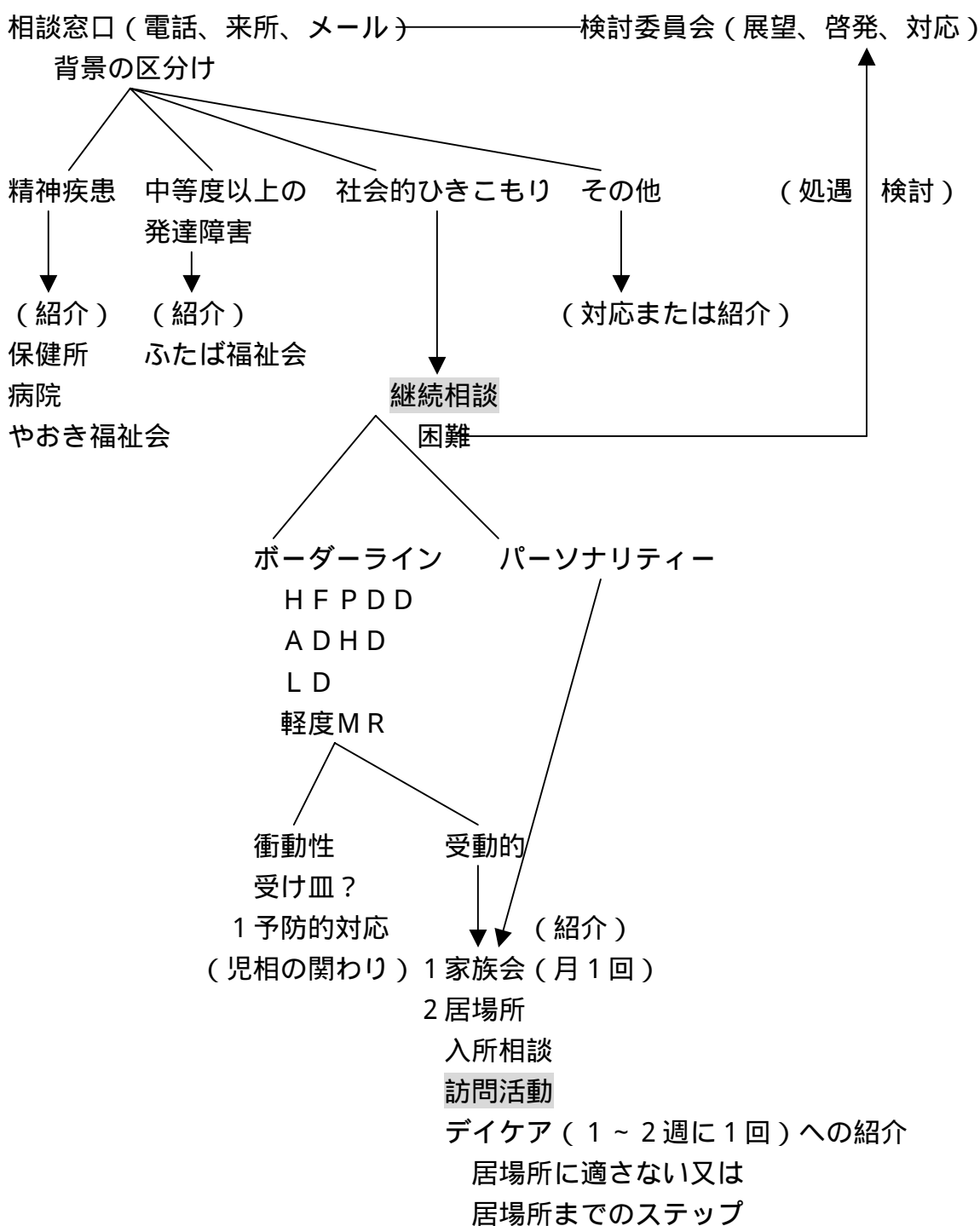
暴走気味の担当者を時には抑制をかけながら、いつも温かい応援をいただきてきました検討委員長・副委員長をはじめ、委員の皆さん、課の皆さんに心からお礼申し上げます。

資 料

資料 1	ひきこもり相談窓口支援の流れ	6
資料 2	相談実績	7
資料 3	家族会の要綱	9
資料 4	家族会・デイケア・啓発活動・講演会の実績	10
資料 5	視察研修について（北海道方面） （平成14年度第4回ひきこもり検討小委員会提出資料）	11
資料 6	講演会のまとめ（青少年就労フォーラム、不登校・ひきこもり） （平成14年度第5回ひきこもり検討小委員会提出資料）	18
資料 7	田辺市ひきこもり支援の体系	41
資料 8	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況	42
資料 9	田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会名簿	45

田辺市ひきこもり相談窓口支援の流れ

(H14.12.作成)



啓発活動

- 外来講師による講演会、視察
- 担当者による講演、資質向上のための研修、助言、指導を受ける
- 母子保健活動からの取り組み、学校教育での取組（ 1を含む）

< ひきこもり相談窓口実績 >

- ・相談窓口開設以降平成15年3月末までに、100家族110件の相談あり。
内44家族47件はH13年度までにあり

平成14年4月～平成15年3月まで1年間の状況

- ・相談実績件数()は13年度から引き続き

	実件数	延べ件数
電話	47(9)	162
来所・訪問	32(9)	175
合計	79(18)	337

- ・相談者

母	父	両親	本人	兄弟	祖父母	親戚	関係者
227	20	8	52	5	13	5	10

その他	計
6	346

内10件は本人と家族で重複
関係者 医師、教育相談、主任児童委員、母子推進員、町内会長ほか

相談窓口開設以降平成15年3月末までの、100家族110件の相談の状況

- ・年代別男女別件数(110件中)

	～10代	10代	20代	30代	40代	計
男	5	20	18	13	1	57
女	2	19	17	10	2	50
計	7	39	35	23	3	107

不明1件

不明2件

- ・居住別(110件中)

市内	59
市外	46
計	105

不明5件

- ・相談結果(実110件中)(H15年3月末現在)

家族会	9(6)
HTH	12(7)
紹介	35(3)

終了	2
保留	14
継続中	21

その他	37
-----	----

()は重複 HTHはハートツリーハウス

- 紹介先 ・家族会、HTH以外
- ・保健所(13)、ひだまり(4)、ふたば(2)、病院(9)、教育相談(4)、
家庭児童相談員(1)、児童相談所(2)
- 終了 ・相談後社会参加に至る
- 保留 ・不登校で対象外とした
- 継続中 ・家族会、HTHの紹介者(15)を含む
- その他 ・関係者からの相談のみ
- ・本人・家族からの不安、ひきこもりではない
- ・既に別機関にもかかっており、聞くだけで終わった
- ・ハッピーの紹介(H13年度)

・相談者の状況

- ・不登校(傾向含む)・中退経験者 71人
- ・医療機関受診あり(過去に受診経験のある人も含む) 38人

社会的ひきこもり家族会の設立（要綱）

主旨 社会的ひきこもりの青少年をかかえる家族が、定期的集える場を設定することにより、社会的ひきこもりへの理解を深め、家族同士が交流を深めながら、家族自身も心理的にひきこもらず、互いに不安や悩みを語り合いながら、共に対応について考えていくことができるような支援を目指す。

時期 平成14年6月から平成15年2月まで2ヶ月に1回
（取り組みの中で1月に1回位の割合に変更していく）

時間 午前10：00～11：30

会場 保健センター診察室

対象 前年度の相談者の中から、社会的ひきこもりと思われる青少年の家族
必要に応じて、随時対象とする 個別相談の継続が条件

人数 3人以上10人まで

運営 対象家族の中で、数人が当番制として受け持つ
将来的には、自主活動としての発展を目指す

内容 学習会 講師は検討委員
家族のおしゃべり会（調整役として担当者）

事務局 健康増進課

各実績

○ひきこもり家族会 (H14.6~)

実施月	対象家族数	出席者
6.	4	母 2 両親 2
7.	6	母 3 両親 1
8.	6	母 3 両親 1
9.	8	母 4 両親 2
10.	9	母 4 両親 1
11.	9	母 4 両親 4
12.	9	母 4 両親 2
1.	9	母 2 両親 3
2.	9	母 3 両親 3
3.	9	母 4 両親 2

○ひきこもりデイケア (H14.12~)

実施月	出席者数
12.	3
2.	4
3	5

○ひきこもりに関する啓発活動

対象

- ・ 日高地方教育養護教諭
- ・ 和歌山県市町村保健師
- ・ 西牟婁地方人権の教育研究協議会 (不登校部会)
- ・ 主任児童委員及び児童委員定例懇談会
- ・ 人権擁護連盟青少年部会
- ・ やおき福祉会
- ・ 田辺ロータリークラブ
- ・ 田辺市母子保健推進員
- ・ 田辺市保健福祉教育相談会
- ・ こころのケア研修 (社会的ひきこもりの研修会) シンポジストとして

北海道視察研修を終えて

1、視察を通して

10月3日から4日にかけて、札幌市精神保健福祉センター、山田クリニック、青年家族ボランティアの会、北星余市高校、ビバハウスと視察した。私自身、田辺地域で実践されている「ひきこもり」相談窓口や「ひきこもり」に対する関係職種への理解、具体的取り組み（居場所づくりも含めて）の到達などから、先進といわれる視察地域との比較及び今後の指針等について得るものがあればというスタンスであったが、視察を終えて改めて「社会的ひきこもり」に対する視点、ニーズ、支援方法、役割など理論構築の重要性を再認識することとなった。

今回の視察のポイントを参考にしながら、今後、田辺市におけるひきこもり支援のあり方について考えたい。

2、視察から得られたポイント

札幌市精神保健福祉センターによる、ひきこもり支援の主体、方法

- ・行政が行う必要性。
- ・精神障害を対象としない。

ビバハウスの課題

- ・ひきこもりの専門性の弱さ。
- ・精神障害者支援の専門性の弱さ。 方向があいまい。
 - 精神障害者の制度利用。これはこれでいいが、補助行政との相互理解がどこまですすむか。また、障害を持たないひきこもりの希望者の受け方 -

3、田辺市における課題整理と方向性

- 1, 「社会的ひきこもり」というニーズによる出発ではなかったこと。
- 2, 「ひきこもり窓口」における相談・支援実績の積み重ね。分析。
- 3, 「相談窓口」での相談・評価・調整の体制。

状態から発生する不安等に対し、障害に基づく資源への調整と、障害を有せず障害者福祉の範疇に入らない支援方法（研究法、社会的訓練、居場所等を含めた利用資源の開発及び既に支援を実施している民間への助成、施策化）などの検討、推進。

行政と民間の役割の違い（責任性） - 民間は当該資源の利用者が対象。

行政は全市民が対象。

障害者と混在することの短所（制度利用も含めて）

- ・当事者の想い（自分は障害者ではない）
- ・障害特性との不調和
- ・障害者福祉資源を利用することで生じる意識の埋没。
- ・障害者制度をとれば、障害者資源あっせん主体の市町村は当然、当該障害者の優先的利用をすすめることになる。

研修報告

研修日時：10月4日（金）10時～12時

研修場所：北星学園余市高校（北海道余市郡余市町黒川96）

学校の沿革（校長談及び資料より）

1965年、余市町（人口2万5千人）の誘致により創立。創立当初より公立高校の失敗生徒の集まる学校、すなわち「底辺校」という位置に置かれていた。

生徒減の中で1987年、廃校寸前まで追い込まれた。そこで教職員が中心になって、今まで行ってきていた生徒に寄り添い自立を支援する教育を、全国に門戸を開く事でのこの難関を切り抜けようと決意し、日本で初めての「高校中途退学者を受け入れる学校」として翌年再スタートを切った。

再スタート当初は生活指導上でつまずいた生徒が多数を占めていたが、最近では不登校経験者が増加し、静と動の両極端の生徒が混在し、指導上更に困難をきたしているとのことであった。

尚、1988年の再スタート後、1990年に服装の自由化、翌年に完全週5日制を実施。

現在の生徒約600名中、北海道外の生徒は約400名と全体の3分の2を占め、出身都府県もほぼ全国を網羅し、和歌山県出身者が5名、内田辺市出身者が1名在籍している。

学内を見学して特に印象に残ったこと

休憩時間の職員室は多くの生徒が出入りし、生徒にとっての職員室は相談室兼居場所兼娯楽室等多岐多様に機能していた。しかし始業の鐘が鳴ると潮が引いたように生徒がいなくなり、廊下や空き地にたむろする者が一人もないことも、日頃の細かい指導の成果だと思われた。

授業風景を見学したとき、学年を経る毎に生徒の授業態度が顕著に変化しており、指導の成果がうかがえると同時に、その指導の困難さがひしひしと感じられた。

（授業風景：最初の1年生は、どのクラスも全員席にはついているが、頭の向きは集団としての体をなしておらず、服装も髪型も奇抜なのが目立った。

次の2年生は、2クラスが座学で1年生よりは落ち着いた雰囲気であった。それよりもすばらしく思ったのは、残り2クラスの体育の授業風景であった。男子はバドミントンを行っており、数面のコートいっぱいを使ってダブルスやシングルスで打ち合っていた。私達がそばを通ると意識的にエキサイトして力を入れたグループもいた。校長は、そのコートに近づき、一人の生徒に代わってくれるように頼み、一本きれいなスマッシュを決め、意気揚々と私達の方に帰ってきた。生徒の方はと振り向くと校長や私達を笑顔で送ってくれている。和やかな雰囲気の中で次の体育館に行くと、そこでは女性徒達約30名が一行になりバスケットボールのランニングシュートを行っていた。この授業は非常に緊張した雰囲気の中で進められており、女性の先生から時々鋭い指摘がなされていた。しかし校長は委細かまわず、教師から死角になる最後尾の生徒を捕まえ話しかけていった。たちまち数人の生徒が校長と笑談をはじめた。この

時、教師より全員にフォームの注意があった。校長と生徒の笑談はまだ続いている。この雰囲気では、校長が女性の教師にどやされるぞ、見物だなあ。と見ていたが、校長もその雰囲気を悟ったのか、さっと身を引いたので生徒達も何事もなかったように授業に流れ込んでいった。

体育館が2つもあるのも驚きだが、最近は体育嫌いの生徒が増加しつつある中で、クラブ活動のごとく、全員が集中して取り組んでいる授業に感心した。また校長が、何のためらいもなく生徒の中にとけ込む姿に民主的学校運営の原形を感じた。

最後に別棟の3年生の授業風景を見学した。さすが3年生という感じで、落ち着いた雰囲気の中での授業であった。私達が教室のそばを通っても、休憩時間に会った田辺出身の女性徒が私たちに笑顔を返してくれた以外ほとんどの生徒は私たちにの方を振り向かず授業に集中しており、1年生が私達に大いなる関心を示したのとは大きな違いがあった。)

私達の質問に対する校長先生の答え

Q：精神的症状の疑いのある生徒への取組は？

A：基本的には、担任と養護の先生が協力して取り組みます。関係機関との連絡もそこが中心になります。

Q：行事を継続的、重点的に取り組んでいることは素晴らしいと思います。特に弁論大会はコミュニケーションをはかる上でも大切な行事と思うので、大会の概要を聞かせてください

A：以前は活発で、クラス全員に書かせ代表を選んでいたが、ここ数年は低調で、これと思う生徒に教師が頼みこみクラス代表を出しています。

Q：30km・50km・70kmの競歩も見応えのある行事ですね。リタイヤをする生徒もあるのでは？

A：保護者や先輩達もサポートしてくれるので、大変盛り上がったものになります。自分の体力に応じて挑戦さすので、30kmで落後する者はありません。それよりも、30kmで自信をつけて上をめざす者の中に失敗者が出てきます。50km、70kmとなると大変ですから。

Q：地元生以外は43の寮で生活していると伺いましたが、休みの日などどのような生活をしていますか？

A：一人の町民として生活しているので、町内会行事に参加し、雪かきや溝掃除にも参加している。また、土曜日は学校を開放しているのでクラブ等で多くの生徒がきている。普段の日も午後9時まで学校を開けているので、夕食後学校に遊びに来る生徒もいます。

Q：問題行動を起こした生徒の指導はどうしていますか？

A：うちには学校謹慎というのはありませんので、すべて家庭謹慎です。最初の頃は、それでよかったのですが、何しろ全国区ですので、親や本人の交通費だけでも大変です。それで現在は、協力農家を何軒かみつけ、1週間程度引き取ってもらい農業体験を科すことにしています。

研修報告

研修日時：10月4日（金）13時～21時

研修場所：ビバハウス

10月4日、午前。北星余市高校の視察を終えて、今にも雨が降りそうな中、徒歩でビバハウスに向かった。30分弱。見晴らしの良い余市の広大な自然に囲まれ、歩く道沿いに林檎の木が並んでいる。丘陵の裾野にある「ビバハウス」に近づくにつれ、道端にイタドリ、よもぎなどが増えてきた。大きさは和歌山県産の5倍はゆうにあらう。大自然という言葉がよく似合っている。余市教育福祉村という木彫りの看板。国道(?)から左に小路を曲がると、真っ赤な林檎畑がある。少し手前に流れている小川をわたり、ビバハウスに着く。犬が吠えている。「ビバ」という名前らしい。背景に広がる丘の斜面のかかりに、あるのかないのかわからない玄関があった。正面に「D型ハウス」と呼ばれる倉庫のような建物。左手に自立支援センター「ビバハウス」。見上げるとそう遠くない斜面にログハウス、作業棟、畑。確かに小規模な村のようである。

開設者の安達氏が迎えてくれた。教員、議員をやっていたという。強そうな意志が感じられる。昼までの時間で少し説明を聞き、昼食を一緒に食べることになる。

自立支援センターにて、少しの間、安達氏より話を聞き、残っていた入居者とともに少し遅い昼食となる。支援者のおじさんが準備してくれた地元料理「ちゃんちゃん焼き」を食す。先日新潟から来ている元利用者（今日はボランティア兼友人）の方も参加した。

料理の語源は、寒い時期にちゃんちゃんこを着て食べたというところからきているらしい。新鮮な鮭をまるごとを鉄板の上に乗せ、キャベツ、椎茸など野菜をかぶせる。溶かした黒みそを合わせ、ほとんど蒸し焼き。これがなかなか美味。昼食も半ば過ぎたころ、昨日、緊急入院したという男性が参加。事情もあるようだが、安達さんが笑顔で迎える。

やりとりも専門的でなく泥臭い。しかし、すぐに溶け込む。共同生活者としての地域の感覚だろう。ほのぼのとしたものを感じる。

安達氏は昼食後、奥さんが余市高校から帰るまで、観光案内をかって出してくれた。余市周辺。ニッカウイスキー・宇宙館・運上家など、雨にも関わらず、丁寧に案内してくれる。地元とは言え、その説明の情報量におどろく。

道々、せっかくだからと入居者との食事会に誘われる。私たちは、視察終了後、早々に宿舎に向かう予定であったが、その温かさと熱心な誘いに負け、夕食に同席することにした。観光終了。

夕方にビバハウスに戻り、ビバの会設立者の安達俊子氏と会う。午前中の安達氏の話と合わせ、次のようなことを聞くことができた。

ビバハウスは、余市高校などの二・ズ、連携を母体にNPO法人として設立された「ビバの会」が、「ひきこもり」状態にある青少年を受け入れ、社会的自立を目指す支援を行っている。ビバハウスには主にひきこもり体験者8名が入居し、日中は、職親制度などを利用し、椎茸園や農場で働いている。ほか、時期的なものとして、除雪のアルバイト、ペンションでの仕事などなど。ハウスでは共同の食事づくり、余暇は合気道、カラオケなど

で楽しんでいる。

もともと、ビバハウスは障害ということではなく、「ひきこもり」支援の活動として出発したようで、障害という視点についてはそれほどなく、ビバハウス建設に当たっても、障害者制度利用によらず、1500万の私財を投じて実現をみている。

であるが、入居者は安達氏から話を聞くかぎり、精神障害者が多く、定義づけされている「社会的ひきこもり」は少ないという印象を受けた。事実、定期的に通院している利用者も多く、最近では、医療機関との連携も取りながら、病気・障害に対する専門的な対応も必要となっているようだ。

こうした現状と運営資金の問題もあってか、本年度は精神障害者グル- プホ- ムを、次年度は小規模作業所をと北海道長期計画にのせる活動を行っているようである。

その他の活動として、余市高校在校生の抱える問題に対する相談に対応すべく、余市教育福祉村教育相談所開設にも力を入れているとのことである。

午後7時前、共同の食事づくりができたようである。1階の広いとはいえない食堂で、食事会を開いて頂いた。参加者は私たち4人、安達氏、入居者の父親、ボランティア（もと利用者）、入居者7人、遅れて合気道の先生（発祥地である田辺にも時々来る）……

様々な想いを聞き、私たちは1時間余りの団欒を楽しんだ。

ひきこもりという状態から脱し、障害のある者もない者も（よくわからないが）一つの屋根の下で生活を共にし、力強く生きる姿がここにはあった。

北海道視察を終えて

極めて忙しい行程で無理があったことを反省しながらも、またとないこの機会と欲張って盛り込んだ視察先。身体は限界、頭は充実。これまで手探りで進めてきたひきこもり支援、官民の役割分担等、これからの行政における支援対策はいかにあるべきか（あるいは民間は・・・）、5年10年先のビジョンを掲げたものを築き上げるためにも、大変有益なものであったかと思われる。今回の視察で得られたもの・明らかになったことから、以下のとおり課題・問題点をあげてみる。（今後の検討委員会での協議事項であり、市としての方針にかかわるもの）

1. まず、「ひきこもり」のとらえ方。（病気ではなく、状態像である）
「ひきこもり」は精神障害者と混在して扱うべきではない。どちらかが駆逐される可能性が大きい。（昨年の斎藤環氏の講義での学習、小委員会での共通理解である）
2. 公的機関が「ひきこもり」にかかわるときの姿勢として、札幌市精神保健福祉センターはよい見本。
行政としての役割を厳しく自覚して、他機関（医療ではなく、福祉でもない）では扱えない「ひきこもり」に取り組むにあたり、長期にわたる対応が必要であるため、利用者を選定することは責任のあるスタンスである。
3. 市行政としては、
「窓口機能の充実」
（対象者への継続相談、訪問活動）
（情報発信・啓発活動）
「家族会の立ち上げ」
（行政主導から自主運営活動に、グループを分けて）
「居場所づくり」への側面的支援
（人的（入所相談）、補助金？）
4. について
「ひきこもり青少年の居場所」として、国の100%予算を確保して「ハートツリーハウス」を平成14年5月より開所（民間）
以前のハッピー（ここには、病気の方、発達につまずきのある方、社会的の方混在）は解散。課として1団体への支援はできない。

「ひきこもり青少年の居場所」は、当然「社会的ひきこもり」の方を対象とすることが望ましい。

しかし現状では、病気の方で「やおき福祉会」を活用しなかった方が数名利用している。(市の窓口からは、病気の方を紹介していない。窓口では、病気の(疑いを含む)方は保健所または病院へ紹介している。)

窓口の現状として、

病気(統合失調症・人格障害)ではなくても、長いひきこもり経過の中で精神症状を伴っている方(医療にかかっている方、いない方両方あり)、ひきこもり期間は短いが精神症状を伴いでも病名のついていない方、発達の課題を有する方等、明らかな「社会的ひきこもり」とは言いがたい方が多い。

「社会的ひきこもり」への社会資源(福祉制度)がない中での取り組みであるため、予算の確保を考えると、民間からの申し出を受けて、平成15年度からは近接領域の社会福祉制度の精神障害者制度の利用(精神障害者手帳・主治医の意見書が必要。ない方は、利用しても補助金の対象とならない)に踏み切ることになるわけだが、基本的には、病気の方は「やおき福祉会」へ、境界域の方が「ハートツリーハウス」へと住み分けていくことになりそうである。

となると、社会資源が増えたことにより、「ひきこもり」という状態像を持つ方の活用先が用意されるわけだが、1.2.で述べたとおり、明らかな「社会的ひきこもり」の方を混在させないためにどうするのかということが問題点として残る。

市は全国に先駆けて窓口を開設し、今後他市町村からも注目されることになる。(評価されつつある)

取り組みだした責任のもと、長期ビジョンをもって、ひきこもり対策への支援(社会制度の成立等)を国・県に向けて働きかけていかなければならないだろう。

今後検討委員会の中で長期計画を立案していかなければならない。

5. 明らかな「社会的ひきこもり」の方への支援策として

彼らが社会へ出てくるには時間がかかるとは思うが、出てこれたときには居場所・仲間が必要となる。

そういう意味でも、札幌市精神保健福祉センターでの当事者のデイケアは参考になった。

将来的には市でも、週1回くらいのペースで開設できるような準備が必要だと思われる。

基調講演 「青年の心のはざまをみつめて」

和歌山大学保健管理センター所長 宮西 照夫

大学の不登校多くなってきた。

18年間で6か月以上大学に行けなかった人 64人

自助グループに参加した人は、社会にスムーズに出ていっている。

ひきこもりの苦しみに何が必要かを話したい

（資料P4表2参照）

1, ひきこもりのタイプ アパシー型（回避性）減った

アパシー型（選択的なひきこもり）30～40歳代

学生無気力症候群、学校の勉強だけできない、

本ばかり読んでいる、アルバイトばかりしている、旅行ばかりしている。

前半10年14名から後半10年8名に

2, 学校まで来るが入れない、家からでられない、頭痛・腹痛がする

3, 人間不信型

信じられない、暗い表現の多い若者

* 共通点...小・中で長い間ひどいじめにあっている

負けずに、学校へ行って、大学まで行っている

勉強はいいけど、休み時間がいや

まじめと思っていた人が、ひとつ失敗したことでストライキをおこす。

{苦しんでいたこと}人間がにくらしい、刺してしまわないか不安になる、

勉強でのみ自分を確認できた、

戦後50年 学校 要求するものが変わってきた

高校進学率

大学進学率

1954年 50%

20年後 90%

50%

学校で多くのものを求められるようになってきた

・ひきこもりの前に何が起こってきたか、高度成長期を迎えた

女性が自由になった時間が多くなった、教育ママ・受験戦争

学校以外で遊ぶ場が失われてきた

親、働け働けの時代、父の姿をかすかに覚えている

・適応する手前でストライキ・不適応・バカらしい

高度になった、多くのものを要求される、家族が時間と余裕を失った

きっかけは？

学校での人間関係うとましい 4割

いじめでは？ イヤになったということを打ちかけなくなった

なぜ、ひきこもる？ 家族の放任主義

自助グループ 老賢会 メンバー 4 名 利用者 16 名

アパシー型 活発、指導者になる...人間関係のひずみが原因

不安発作型 利用少ない

若者の心を支えること...外国に子どもをなげやる親のことと同じ、

彼らが求めているのは、学校 = 文化 = 社会ではない

ふるさと、家庭がある それを作っていたか

まず、心の安定

例 Aくん インドネシア人 26歳 大学院中退し、日高町で仕事

仕事にいけなくなった。頭痛・腹痛、雇い主が病院へ連れて行くが異常なし

ふるさとを作ったあげる 毎週インドネシア料理・音楽、仲間入れる

2～3か月で父母と呼ぶ 不満ない親切

不適應をおこした文化とちがうものを作ったあげる 母国・文化を

日本に来て待っていたのは、重労働だった、仕事できないと強制送還される

彼の求めるもの、不安感を保障してあげる 受け止めてあげる

ふるさとなないとスタートできない

「青少年就労支援について」 和歌山労働局 藤原義彦氏報告

(ハローワーク・労働基準監督署を県ごとに管理している所)

近畿ブロックは、高校生の就職率悪い ワースト2位

雇用対策、高齢者向け・若者向け、ひきこもり対策ない

1, トライアル雇用

2, 求人開拓

シンポジウム

コーディネーター 田辺市ひきこもり検討委員 寺沢啓三氏

シンポジスト 4人

西田 孝道氏 (和歌山県立南紀高等学校教諭 < 定時制 >)

教諭生活 38年 そのうち定時制 35年

12年前 全日制で不登校になり定時制に来た子

6月まで順調だったが、休みがちになった

卒業の時に、入学したとき、定時制、ここならいけると思った

先生見捨てなかった、仕事始めた

家庭的雰囲気・労働体験できる

単位制 40人で5人担任 不登校経験者 7割卒業できた

社会的ひきこもりの子

大学出てからひきこもる...学生時代人間関係のあり方教えてほしかった

単位制は校則自由、得意の科目の積み上げで卒業できる、

彼らの苦手としている対人関係のところがたらない

生徒の働く場がない 仕事することで子どもが大きく変化する

定時制入学の動機

15年前 働きたいから30% 働いていた 50%

昨年 働きたいから50% 働いていた 30%

不登校・ひきこもり経験者 仕事ない...社会の無理解

生徒自身のハンデ

仕事がないことを政府・行政に訴えていかないといけない、

子ども達に仕事・システムの場を

北山 守典氏(紀南障害者就業・生活支援センター所長)

全国的には、精神障害者の雇用は追い風になっている。

本人は病気を隠して就職すると三カ月で止めてしまう。

薬を飲んでいるのがばれないかと不安を持っている。

平成10年10月 やおき福祉社会就労調整検討委員会で、処遇について考えた

平成11年 精神障害者就労支援センター(全国に先駆けて)

平成12年 就労支援センター 全国で4から5カ所

メンバーのアンケート(通所・在籍している人)

- ・地域で生活したい
- ・自分の力に応じた仕事をしたい
- ・年金に頼らないで安定した生活基盤を持ちたい

力のある人は、外に出していこう!

職員をメンバーといっしょに職場に入る

企業の生き残りの感覚を身をもって体験する

事業所の開拓

全国の中で就労生活支援センター 284名

身体障害者 213名

精神障害者 28名(15名まかなっている)

知的障害者 13名

地域在住者も含めて、社会福祉協議会、福祉課、生活支援センターから就労生活支援センターへ

登録利用に来た人は、4から5カ所で、集団訓練、作業能力訓練、服薬管理をする

早い人で三週間から六カ月で終了するその後各企業へ

個人の性格や病気を見極める

自分の病識を持っているか、医師とは常に連携している。

グループ就労(3から5人で)悩みを分かちあう

他のメンバーが支え合う

ジョブコーチ・支援ワーカーが入りやすい

平成14年 強力機関型ジョブコーチ

生活支援必要 5人(ふたば1人、やおき2人)

自助グループの中にワーカーズクラブ 精神障害者のスポーツ活動、
ピアサポーター

同じ病気を持ちながら仕事をしている、メンバー同士の話
グループ就労、受け入れの企業体力弱っている

コーディネーター 寺沢氏

若者全体に就労支援が必要ではということで、一般の若者にもこのようなシステムが必要
なのでは...

斎藤 環氏(医療法人爽風会佐々木病院診療部長)

千葉県船橋市で診療している、ひきこもりの問題を中心に

「home」という映画(弟が兄を撮影)が、話題になっている

結局、兄はひきこもりから旅立ち、予備校の先生のアルバイトをしている。

2年前からひきこもり対応のガイドラインができ、良い方向に向かっている。

大きな問題として、就労支援

ひきこもり、長いあいだ家庭から出られない

精神症状...強迫神経症、対人恐怖症

周りの人の理解が不十分 当事者がたくなになる、

5~6年も顔を見たことがない親

不登校 139000人と密接な関係にある

いったんひきこもったら、自然に抜き出せるのは難しい

各自治体、精神保健福祉センターの利用をされていることに差がある

田辺市は、先進的な取り組みで、モデルケースになる。

一定の予算を組んで取りくんでいるのは、評価したい。

ひきこもり検討委員会...保健所、病院、福祉施設などネットワークを作り、アクティブに
連携している

「激論、ひきこもり」

ひきこもりに限らず若い大人への支援

働きたくないからひきこもっているのではない

意欲、欲望もなくなっている

立ちなおる過程でのハードル

1, ひきこもりから出るとき、デイケア、自助グループ

家族が理解、リラックスできる

仲間と出会って意欲を取り戻していく

NHK ではひきこもりサポートキャンペーンというホームページを出している

2、就労

ブランクが長い人、年齢30歳を超えていると、狭き門となる。

一度失敗した方や、もう1回ひきこもった方の対応は難しい。

就労体験をいかにしていくか、

きめ細かな段階的指導、ネットワーク、職親、ジョブコーチ、グループ就労
など

田辺市でもできると期待しています。

工藤 定次氏（NPO 法人青少年自立援助センター理事長・タメ塾塾長）

若い大人たちが、どういう状況で存在しているのか

ひきこもり、精神的病、障害者もいる

先進国の中で大人になる時間が長くなっている青年群がかなりの数存在する。

ヨーロッパによる若年ホームレスが10万からいる、27歳まで就労支援

先進国など豊かな社会は大人になる速度が緩やかに、長期化している

日本は、若者に対する支援

新学卒者の方策あった、できる側の就労支援はあった

はずれたものへの支援は考えていなかった

具体的なアイデアや取り組みはない

たとえば農業、漁業の若者に対し特別公務員として実践している

親、個別の責任とされる

厚生労働省は対応策を考えているところ

ひきこもりもあたり前の精神群像、特別な存在ではない、以前からずっといた

若者全般としての対応策をするのは重要なことと思う。

Q、（坂本さん）西田先生が、システム的なものを考えて...と言われたが、工藤先生から情報があれば教えてほしい。

A、（工藤）今のところありません。若者の存在、どんな若者たちもいるんな就労支援がなければならぬ。北山さんがされていることは地域性を考えると有効です。

コミュニティ...お金を払って教えてもらう

もう1回トライする

お金を払うことによって、両者のプレッシャーから解放される

トライアルプレッシャー強すぎる

万人に使えるには、就労育英金として試されるシステムがあれば大きくなっていくのでは
（資料11ページ参照）

Q、（柏井さん）千葉県船橋市の作業所で働いていましたが、北山先生にお伺いします。精神障害者の就労は難しいですが、どのような仕事をしているのですか。

A、（北山）夜間の労働、危険な仕事以外はほとんど行っている。

ヘルパー、店員、コンピューターグラマー、外交、営業など、特殊な仕事以外はできると思っている。企業の受け入れの土壌が、田辺周辺は高い。育て上げて、3週間～6カ月のセンターにくるまでが長い、待つつらさがある。前の仕事とのギャップがある。その壁をクリアしたら。希望の職種を探せない(山間部など)。病気を開示する、隠している場合は支援に入れない。

Q、(南さん)大人になるまで時間がかかる。働きたいけど社会へ出て行けないということがテーマと思うが、大人の条件(コミュニケーション、欲求の実現)が、うまくできず大人になれない。大人になれない青年が増えてくる。

不景気、親にもゆとりがない。子をつき離れた時、若年ホームレスが増えているのか、若者の就労に変化を与えているのか。

A、(斎藤)むずかしい質問。臨床、情緒的なコミュニケーション能力、待つことできる、衝動性の問題

未成熟さから発生してくる

- ・待てない若者、切れやすい
- ・コミュニケーション能力低い、我慢強い

成熟可能な社会

- ・通過儀礼のある所では成熟
- ・極めて貧困な社会 子供が働かされる要因が減った

部分的な対応でしかないトレーニングシステムの整備

ソーシャルスキル、対人関係とれる部分の制度、ネットワークとして、行動性(発達障害)の研究を期待する。

A、(工藤)自己決定、自己責任能力、食べる力、自立とは何か、めしがくえること、不景気 ホームレス、麻薬中毒、社会を引き立てる犯罪、貧困だけではない。

子を育てる親の意識の問題、未成熟のまま育てられる。社会全体における子育ての未成熟が課題になる。

若者含め自分の生き方どうか、価値観の違うところで日本社会に若者ホームレスは避けられない。

たとえば、生活保護で育った子供は労働を見ていないためできない、労働を見せてきたか、見せていない豊かさ、見ない成長考える必要がある。

教育は大きい、食べていける知識

個々大事にしすぎてしまったことを考えてみる必要がある。

支持、命令、禁止になれていない、社会から浮いてしまう。

社会性をどうつちかうかを、再度考える必要があると思う。

最後に一言ずつ

(西田さん)個を真剣に考えないといけない。人間が進歩する。仲間を大事にする、人間らしさを持つこと。

(北山さん)村が崩壊した。自分で雛形がないと創作できない子育て、どこかで崩壊した。学校が子に自分の生きる力を省いている。

就労の幅は広い。3障害ある。精神障害者は理想と競争したがる。

12月6・7日に精神障害者職業自立支援セミナーが紀南文化会館大ホールであります。出席してください。

(斎藤さん)社会的個に対する考え方になると、思春期、青年期はダイナミックな時期で、予防を目指していない(価値判断入ってしまう)

いかに対応するか、対応をいかに構築していくか。この地域の関心は高い。うれしかった。予防より対応に目をむけて、続けられるようサポート期待したい。

(工藤さん)就労であって就職でない。楽に生きられる、大人で力のあるマネジメントのある人にボランティアしてもらおう。

第2回目は個別的なフォーラムをやりたい。

閉会あいさつ 実行委員長 米川徳三氏

大きなテーマ、一人一人が日本の中で支える一人である。本来人は、これから未来を引き継いでいく。今後、就労、子育て、障害の問題など新しい視点も含んで考えていく。障害者だけでなく大人が暮らしやすい社会に。明日、ひきこもり不登校の講演会をもつが成功をさして頂いたことをありがたく思う。

青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラムのまとめ

11月23日 文館大ホール PM2:00~5:00

参加者 179人+20~30人

(関係者 93人・一般 86人+20~30人(内80人市外))

講演内容 質疑応答 別紙資料

参加者の意見感想より

- ・ 教育の現場と公衆衛生（特にメンタルヘルス）の間に、相互にいまだに壁が強く高くあるのですが、そう感じるのは私だけでしょうか。どうも教育（学校）に私たちのようなメンタルヘルス関係者が入っていくことを、好く思われていないように感じるのですが・・・。
- ・ 幼児期の子育ての点がもっと重要視される発言がほしかった。
- ・ あちこちにすばらしいことばやドッキリさせられることばがあり、勉強になりました。
- ・ シンポジストの先生方のお話は、とても現実的なもので、問題意識を常を持って生活しようという気になりました。また、斎藤先生のような有名な先生のお話を伺えてよかったです。
- ・ 斎藤先生、工藤先生のお話にながきながら聞いてしまいました。斎藤先生の、友達との出会い、就労とのお話で、今私の子どもがいきあたっていることだからです。工藤先生は、人が生きていくうえで当たり前のことで、私が考えている子どもたちに、わかってほしいと日々悩んでいることです。ハードルを越えてほしいと思っています。
- ・ 今日は少し遠方からやってまいりましたが、就労支援ということに絞ったひきこもりの問題、各専門に活躍されている方々の実情のお話を聴くことができ、よかったです。わが息子は大学はかろうじて卒業、2箇所ほど就職・バイトとしましたが、現在ひきこもり中で、作家になるといってお酒・タバコ読書、昼夜逆転の生活しています。コミュニケーションのまずさ、大人になりきれない未成熟さ、親からこずかいをもらって過ごす生活、家は両親ともに年金生活者です。その自立を促すにはいったいどうしたらいいのか。未来に対する不安がいっぱいです。
- ・ これまでまったく知らなかったひきこもりについての知識・情報を得ることができ、とても有意義なフォーラムでした。ひきこもり等についての自分の認識が大きく変わりました。

- ・ 失業率の高い大阪で開いてください。
- ・ とても参考になりました。日本の教育の制度が問題とっておられました、他国の先進国ではどのようなコミュニケーション方法の教育制度があるのか教えてください。
- ・ 小さな田辺市ではありますが、充実した支援活動を行っているのを改めて認識させていただきました。
- ・ 大変なことだと再認識しました。
- ・ 登校拒否・不登校もひきこもりも親や家族だけで抱えてしまわないように、社会的に支援していけるシステムの整備が不可欠だと思います。
- ・ ひきこもり等、青少年の問題について、今回就労ということで聞かせていただき、大変よかったと思います。大きな問題であり、いろいろな考え方のある中、実際の活動等通じて聞いたことは大変良かったです。
- ・ 皆さんの活動が広く社会に知られ、企業がインターシップ制度を採用したり、就労しやすい環境に変わっていくことを期待し、応援させていただきます。勉強になりました。
- ・ 「育て上げ」ネットについては、朝日新聞で知りました。大阪のほうでも同じような集まりがあるのでしょうか。
- ・ 時間が短いのが残念でした。講演もシンポも中味の濃いものでした。「ひきこもり青年」の問題も青年全体の問題との共通のことだという指摘には、本当にそうだと思います。田辺市の取り組みに具体的な支援を考えたいと思いました。
- ・ 中学生の不登校と、高校生の不登校ひきこもりで悩んでいます。高校生の学校のことだけでなく、ちょっとした仕事場で少ない収入でも得ながら人とかがわれる職場がほしい。
- ・ 私自身が学生でなくなってから久しいので、最近の青年がどのような教育を受けているのかはわかりませんが、「育て上げ」だけでなく、「育とう」と青年が受身でなく、積極的に思える取り組みが必要ではないでしょうか。市内で見かけるモラルのない青年を見ると、今の教育はどうなっているのだろうと危惧します。一緒に取り組んでいくのが大切ではと思います。
- ・ 田辺市長の直々の挨拶、感心しました。今後ともご協力よろしく願います。
- ・ 行政に勤める者として、今回のフォーラムは、テーブルの上にはいろいろ並べられたが、国・都道府県・現場・若年層の間であらうにも、現実感、意識の差がありすぎ、現場を担当する者にとっては、混乱してしまうものでしかなかった。ひとりの現場職員、それもマンパワーが不足する中で、何をすれば効率的に動くのか教えてほしい。

- ・ 大阪で登校拒否やひきこもりの会の世話人を約15年続けています。大阪では、両親を通して子どもに働きかけるのが主流で、今日は初心に戻って参加しました。
- ・ 工藤先生のアンクルプロジェクトに関心があります。残念ながら関東では利用しづらい面があります。関西地区で似たような考え方を実行されているところがあれば紹介してほしいと思います。
- ・ 就労支援は精神障害者も含め現在の社会の中では深刻な問題だと思います。各関係者のネットワークにより具体的な策を検討していく必要があると思います。
- ・ 障害者に対する生活支援というものが、追い風に乗って全国的に展開されている中で、一般健常者の就職が非常に厳しい状況です。「ヤング」の就労支援をもっと「システム」がないものか考えています。「ハローワーク」での求人者の集会で「就職」の指導がほしい。
- ・ 今回の資料の中で、豊かさが青年の成長を遅らせると書いてあったのですが、本当にそう思います。欲が満たされれば、後は無気力しか残らないと思います。本来青年の指針となる私たち大人が、簡単に物を与えすぎたり、逆に大人自体が不景気、平和からくる閉塞感が漂っていて、それが青年に伝わり過ぎていて、夢や希望が持てない若者が増えてきて、無気力、無関心につながっていて、様々な弊害をもたらしていると思います。私たち大人が、若者に対して恐れず、関心をもって生きる喜び、辛さ、厳しさを伝えていくことが大切だと思います。
- ・ 求人情報を見ると、条件として高卒以上、また大卒以上と書いているが、中途退学をした子どもには就職の道は開かれているのでしょうか。
- ・ 関係者のご努力に敬意を表します。
- ・ まだまだ「社会的ひきこもり」の人の支援が不完全であることを実感しました。もっと「社会的ひきこもり」が一般に起こっているという事実が広まったら、「欠陥」または「落第者」というような意識も、本人・他者ともにそのような認識が消え、安心してひきこもれ、自立しようとする充電期間になれるように思いました。「育て上げ」ネットという支援事業は重要であり、不況の中、むずかしい問題ではありますが、頑張ってください。
- ・ 本日フォーラムに参加させていただき、就労支援のむずかしさを再認識させられました。一機関ではなく、関係機関の協力、支援があって実現できるものと考えています。本当にありがとうございました。教えていただきたいことがあります。田辺市ひきこもり検討委員の構成員について 社会的ひきこもり青少年の居場所の設置運営については民間なのでしょうか 田辺市に開設されたひきこもり相談窓口の状況 ひきこもり青年を居場所にこれ

るようになる方法は。最後になりましたが、参加に際して担当者の方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

ひきこもり不登校講演会

激論ひきこもり不登校 工藤 定次×斎藤 環

平成14年11月24日

ひがしコミュニティーセンターにて

医療法人爽風会佐々木病院診療部長 斎藤 環 氏

NPO法人青少年自立援助センター理事長・タメ塾長 工藤 定次 氏

司会：田辺市ひきこもり検討委員長（精神科医） 宮本 聡 氏

3つのテーマについて

1.ひきこもりについて 2.不登校について 3.自立について

1. ひきこもりについて

工藤氏：ひきこもり青少年について30年かかわってきた。ひきこもりとは何だろうという時整理して考えてほしい。色々な事件が起きた時マスコミも含めて「ひきこもり」と使われることがある。ある種の犯罪性を持つのではないかと流されたと思うが本当に彼らはひきこもりなのか重要である。

近年、ひきこもりということばは突然聞くようになったと思うが「ひきこもり」ということばがなかっただけでずっと前からひきこもりという現象はある。急に突然出てきた訳ではない。当たり前の辞書で「ひきこもり」とひくとのっている。それが中心となる概念であって歴史的概念と思って欲しい。

「ひきこもり」という単語でとらえると、「ひく」と「こもる」という単語が合体したもの。

（新潟監禁事件 状態でいうと、「ひきこもり」は限られた空間で姿を消した状態である少女である。犯人は社会参加していないいわゆる現在いわれている社会的ひきこもりの範疇である。）

なぜ、この話をするか。不登校でも何でも色々な不登校がある。方法論・対応にも違いがある。ひきこもりも同じこと。どういうひきこもりという区分けをするという概念をいれこまないと全て同じ方法で解決しようとするとう過ちをおこしてしまう。（日本は不登校に対し統一の方法で実践してきた）ひきこもりは、家から一步も出ない純粹のもの（グループ）、社会から引くというのが主流でいわゆる社会的ひきこもりのもの（グループ）、遊びに行ったりはする寄生虫・パラサイトのもの（グループ）がある。

対策として についてはたまには外に出られるように自助グループ・デイサービスなど広めていくと仲間作りにもなり、社会的経験をつんでいくことができる。 についてはそんなことはできない。外側からのアプローチになり同伴するようなアプローチになる。 については遊ばしておくか家からたたき出すこともありうる。アプローチの仕方は詳しくは本が出るのでそれを見て欲しい。

とにかく、どのグループかを見極める力が重要な課題である。相談に行く時、どういうひきこもりなのか分けて考えられる人を探して相談されるべきである。相談される側もどういうひきこもりなのか聞く必要がある。

斎藤氏：まず「ひきこもり」とは病名かどうかと問われた時、病名・診断名ではない。医師の立場から診断をしなくてはならない。病気でないのになぜ精神科医師が関わるのか。それを説明したい。「ひきこもり」ということばの位置付けとして、ひきこもりに近いことばとして状態をさすものでは、不登校・家庭内暴力とかあいまいな形で教育界、精神医学で慣用的に使われてきた。実際に、不登校・家庭内暴力のケースに関わってきたが、その際人格障害などの診断名をつけてきた。ひきこもりを「ひきこもり症候群」あるいは「シンドローム」とするのは不適切。ひきこもりの定義は、「(自宅にひきこもって)社会参加をしない状態が6ヶ月以上持続しており、精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」とされている。社会参加にもいろいろある。(家族といっても社会参加ではないかというものもある)社会的ひきこもりというとき、基準は社会参加をできるかどうかである。ここでいう社会参加は思春期以降、家族以外の他人と深く関わることである。外出できるかどうかは重視していない。

また、ひきこもっている方のほとんどの人が葛藤し、社会的ひきこもりに苦しんでいる。というのは、ホームページに若者の訴え、どうしたらいいかわからないという心の叫びがたくさん寄せられているからである。ひきこもりの問題性を主張していかねばならない。よって定義に書かれている6か月というのに意味はない。問題があるといっても全てを問題視してはならないのだが。ひきこもりにも種類がある。きちんとした分類ができるかは難しい。できるかもしれないし、できないかもしれない。ただ言えるのは出会ってすぐには分類できない。深く関わり関与することで分類は可能である。働きかけをしていかないとみえてこない。不登校についても関与しないとわからない。最初から方法を固定してしまうと関与も間違ふ。

ひきこもりは、精神疾患があってひきこもる場合と、ひきこもってから色々な精神症状があらわれる場合がある。後者がメインになる。治療は健康な精神を目指すものであるが、全てのひきこもりが精神医療を受けることではない。

田辺市は先進的、モデル的な取り組みである。

宮本氏：和歌山の状況

和歌山市に精神保健福祉センターもあるが、社会的ひきこもりについての取り組みは県下にはない。精神科医が役に立つと言われているが家族だけの話を十分にきけない。病院はあるのだが・・・実際、病院は統合失調症の治療に時間をとられる。そのかわり行政(田辺市の窓口)が聞いてくれていると思う。ひきこもりを区別し対応している。医者から見てもすばらしい。

2. 不登校について

斎藤氏：昨年度不登校数 13万9000人 内中学生1万2000人 1人/36人不登校である。1クラスに2人の時代やってくる。1975年以降右肩上がりで急増している。調査方法：学校側が教育委員会に自主的報告してでたもの。実際より控えめな数字かもしれない。というのもどの学校も不登校数が少ないのを自慢している傾向がある。不登校を恥じる傾向があるのである。恥じるとかの問題ではない。どのような状況、家庭、児でも不登校は起こり得る。全体でみるべきである。以前、不登校対策協議会というものがあらゆる対策をしたが、少子化は進んでいるのに不登校数は増加するという現象は続いている。どうしたらいいか。文部科学省でスクールカウンセラーやセンターなど制度を一生懸命していた。国全体で進めている。スクールカウンセラーが入ったからと言って不

登校が減ったか。ぶっちゃけた話不登校が減るだろうと思って導入したが減らなかった。ではスクールカウンセラーを何で評価しているかというのをうけた方の感想で評価している。そうではない。減ってなんぼのことがあると思う。(不登校を減らすのほうがいいかというのは別問題として)

10年前、80名のひきこもり者で86%が3ヶ月以上の不登校経験者。

大学委託研究でアンケートにより調査した結果、中学校3年生で不登校になった児(15歳)5年後(20歳)で23%が就学・就労していない。全てがひきこもっているとはいいがたいが15~20%は長期的にひきこもっている(フリーター・10代で主婦などひきこもりばかりではない)

また、大学生の不登校もいる。年間万の単位でひきこもり人数増加している。数年働いてからその後ひきこもるケースもある。母集団は不登校ではない。

ひきこもり予防・不登校予防反対だが、ただ不登校の中にひきこもりと同じ生活をしている人がいる。そのような人に対しては早期介入をすることは大事である。不登校は適応指導教室、メンタルフレンド、フリースクール、教育センターなどたくさんの資源がある。ひきこもりより不登校の方が対策多い。その活用をするべき。社会資源を活用しないのはもったいない。不登校の時介入できれば早い方がいい。

工藤氏：昨年相談件数 1400件 (TEL入れると3000件以上) 全国の約半数

そのうち 不登校経験者 1/3

いったん社会にでて引きこもる 1/3

思春期の問題を大人までひっぱっているもの 1/3

かなりの比率で不登校経験者がひきこもるといのがわかる。

文部科学省調査方法 ホームページに調査方法のっているがひきこもっている全ての人が答えるか。そうではない。また学校に行ったが社会参加できない不登校もいる。あらゆる理由から23%は信じられない。斎藤先生が15~20%ひきこもりと言ったが日本の歴史的な不登校を考えてみるともっと割合は増える。

30年前、唯一不登校についての公的なものとして、横浜の学校の教育相談があり、病院の中では企業者対応のものがあつた。

不登校は、以前、母子分離不安症と言われたもの。自閉症と言われたもの。情緒障害と言われた時もあった。ひきこもらなければならない状態があつた。(家から出られない、出さない)

ひきこもりの人数は相当な数になる。相談件数の中では、19歳から最高47歳の人がある。10~15年ひきこもっている人はざらにいる。長期間ひきこもった人たちはきちんと対応されてこなかったのかかなりの年数ひきこもる。

青少年自立援助センターに

社会参加・自立

よるひきこもり相談

10代 25%

100%

20代 50%

20~25才 80%・25~30才 50%

30代以上 25%

40%

男女比はほとんど違いがないと思う。

早期介入が必要というののいかに有効性をもっているかわかる。たいがい若い人のほうが吸収率もっている。介入せずに待ちましようという空間では対応は不十分となる。

宮本氏：適応教室などかなり役にたっているという話だが田辺市にはない。県内にはある。（御坊市・新宮市では、有効に機能している）学校の外においてるのが当たり前。

田辺市による相談件数 81 件の内 73% は不登校あるいは中退経験者。ひきこもり抽出マニュアルにも男女比 1：1 となっている。

少し自閉症という話もでたが、脳の機能障害であり、知的を合併しないものを不登校としてカウントされていることもあり、3 歳までに診断可能なものである。

3. 自立について

工藤氏：自立とは飯を食って、社会を生きる力。斎藤先生の自立とは違う。フリースペースなど不登校の人が集合し、相談する。そして心のケアをなされある種の経験をする。大事にされる時期はあってもいいし、そっとされる時期もあっていいが、実際社会で生きていけるようなことを需要するような経験値を持たせないとその個人が社会を生きていくすべがないと是非考えて欲しい。大事にされすぎると、社会に出るとき「～しなさい」と言われるとかなりの拒否がある。（すごい顔をする）こわれそうで注意できないこともある。社会的な経験値をつまなければならない。その過程を学べる場、社会性を学べる場が必要。自分達で世間の仕事をもってきてお金をもらう。皆でやるのがどういうことか、スピードはどうか、生きるという時に当たり前の経験をする期間は大事である。学校というのは、社会的に必要なものを訓練される場。

1 つのポイントとして、1 つの機関だけではできない。東京都福生市では、保健所を中心として思春期相談員（医師・保健師・教師など）が話し合う場がある。どこに相談に行けばいいかなど記載している相談マップと言うのもだしている。その点からみて、田辺市はひきこもりに関して先進的な地域である。ただ不登校についてはどうか。

学校に行きたいという不登校児たくさんいる。行きたいけど行けないというのが圧倒的。思春期について、形ではネットワーク的なものをはじめべきである。

宮本氏：田辺市では保健所中心に、思春期事例検討しようとしている。そういうネットワークにつながればいいが。

斎藤氏：どちらが正しいとはいえない。立場の違いもあり、工藤氏は支援側、私は治療側になる。医師としては価値観にこだわらずやるしかない。いわゆるパターナリズムからの脱却。医師がいつていることに根拠があるか、信頼できるか大事。セカンドオピニオンを積極的にすすめる。はじめてフェアな関係が生まれる。人間が働くかどうかは趣味の問題だと思っている。個人がきめることであって医師が「働け」というべきではない。働くかどうかは本人が決めるべき。ただし本人がそう思うならそうした方がいいと言ったり、ここに行けばいいと言う。自立は自発的なもの。自発性をもたせる。

持たせることは難しい。自発性があると仕事についても充実しやっっていける。工藤さんの方法論はきめ細かいマニュアル。逆に自分は放任的。最後の判断は本人にさせる。自発性をもたせる。「home」という映画おもしろいので是非みてほしい。弟が、ひきこもっている兄を撮影。最初、弟は正論で立ち向かうのだがひきこもっている人に対しては正論は通用しない。解決しない。そこで弟は方法が違ったら違う方法です。一切弟は「～しなさい」という働きかけをしないようにし、ひたすら会話するのである。会話が成立すると心を開いていく。会話すること、コミュニケーション

ンの維持は自立につながっていく。この映画からも自立は自発性、根源はコミュニケーションではないかと思われる。よって家族には本人と話すことをすすめている。(ケース・バイ・ケースであるが)

宮本氏：統合失調症の方の社会復帰の場で、生産活動より消費活動からする。

質疑応答

Q.不登校親の会

不登校のままひきこもりになった児に対してどうしたらいいかと検討し、別の会に発展。HAPPYになった。ひきこもりの事業が教育関係機関によってしていたものを精神疾患に詳しい田辺市健康増進課にいったのは画期的なものではないか。しかし、今不登校だけが取り残された状態になっている。田辺市だけの不登校に対しての相談窓口は貧素。不登校とひきこもりの問題は一緒ではないか。行政の中では難しいかもしれないが、一緒にできないものか。不登校の居場所が欲しい。ひきこもりと不登校と一緒に活動していくにはどうしたらいいか。アドバイスがほしい。

A.工藤氏

行政はスピードが遅い。行政を待って悠長に構えることはできない。人生時間の戦い、待ってられない。厚生労働省は具体的な働きかけはしている。行政を基底に考えて動く考えは間違い。あえていうならマネジメント能力を持っている人にアプローチする。行政の中で力を持っている人にアプローチ。トップダウン方式。上からぽんとおす。いろいろなことをすすめるにあたり、親の会ではない人がした方がいい。思いが前に出すぎて誤解される。要望書は具体的に、どういう支援をどこにほしい。場があっても、スタッフの質がいいかどうか。官のメリット、出席日数としてカウントされるか。圧力をかける。目的をはっきりと多くの人を巻き込む。

A.斎藤氏

先ほども言ったがスクールカウンセラーやフリースペースなど不登校に対してのそういう場はある。まずはそういう場所を活用してみても・・・文部科学省で提言してみます。

A.宮本氏

ひきこもりの相談窓口が充実してくれば、不登校関連も変わると思うのだが。田辺市のひきこもりの窓口は、相談・委員会・家族会・居場所・デイケアへとフォアードはいるが、コーディネートしてくれそうな人が必要だ。

Q.斎藤氏の予防ではなく対応だということに共感し、働くのは趣味の問題というのは好きなことば。工藤さんのやっていることに疑問。過保護になってはいけないといったが実際、自分自身過保護になりすぎている部分がある。過保護は悪いと言った。工藤さんの発言が気になる。抵抗感。

A.工藤氏

相談平均年齢25～26歳。生きることが迫っている。私は何も強制的ではない。実際決めるのは本人なんだ。こうしなさいと言っているわけではない。自立と考えた時どうしていけばいいか、自

分は手探りで対応してきた。ひきこもりにたいしてどれだけ経験知があるのか。経験知を持ってから批判して欲しい。本当の批判が欲しい。その上で自分達に何がたりないのか見つめなおせる。そういう意味で斎藤先生と立場の違いからこの様に話し合いをできることに感謝している。ただ同調はしないが・・・。

A.斎藤氏

ひきこもりはすばらしいとも言わないし、社会がすばらしいとも思っていない。ほとんどの人はコミュニケーションがなければ生きていけない。この信念は譲らない。だがコミュニケーションを強要することはどうかという批判もある。自分より工藤さんの方が有効性は高いと思う。支援と治療は違う。利用する人の判断と支援者側が合致すると有効性がある。きれいごとを言っていることもある。

Q.徳島保健所保健師

関係者ネットで不登校などの問題ある。 18歳すぎると相談の場がない。いろいろと不安がある。また ひきこもっている人の中で精神疾患とそうでない人の区別できるのか。当事者に対してどういったかかわりがよいのか。

A.斎藤氏

精神疾患については薬物有効。ひきこもりの人には特別の症状はない。基準はコミュニケーションがとれるかどうか。他人と話して普通に会話できないことが多い。コミュニケーションの意欲欠けている人多い。

家族会優先。本人が出てきて人数そろろうとデイケア。相談対応の中心。(ある条件で訪問併用)
NHKサポートキャンペーン、ホームページあり。Q AND Aもある。
広報活動、ホームページ。その存在をアピールしていく。

A.工藤氏

保健師の対応で。

家庭内暴力など半年から1年のひきこもりでありうる。3から5年になると病理性が高い。

社会的ひきこもり

講師 斎藤 環（爽風会佐々木病院）

1 「社会的ひきこもり」とは？

（自宅にひきこもって）社会参加をしない状態が6カ月以上持続しており、精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの

ただし「社会参加」とは、就学・就労しているか、家族以外に親密な対人関係がある状態を指す。

2 事例に共通する主な特徴

多くは不登校から長期化

きっかけとしては、受験の失敗、就労の失敗など、なんらかの「挫折」体験

ただし、こうした挫折体験は必ずしも必須のものではない

内向的で、家庭では「手のかからない良い子」とみられがちだった男性に多い

しかし特定の性格傾向・家庭環境との関連性は必ずしもあきらかではない

ほとんど外出もしないまま自室にとじこもり、昼夜逆転した生活

強迫症状、対人恐怖症状などの精神症状を示す場合も

ときには家庭内暴力や自殺未遂にいたることも

放置した場合、自然な回復が期待できない

控えめな推定での「ひきこもり人口」は50万～100万人

1970年代から徐々に増加

傍証としてはほかに「パラサイト・シングル—〇〇〇万人説」がある

3 随伴しやすい精神症状

不登校

対人恐怖

(自己臭 視線恐怖 醜形恐怖)

被害関係念慮

強迫症状

心気症状

不眠と昼夜逆転

退行・家庭内暴力

抑うつ気分

希死念慮・自殺企図

4 関連する疾患 初期診断が重要

統合失調症 (ex. 精神分裂病 ・ もっとも重要)

鑑別のポイント

幻聴の存在

独語、空笑、奇妙な姿勢

妄想のあり方

「テレビやラジオで自分の悪口が放送される」など、メディアを巻き込む場合や、共感や了解が困難な飛躍を含む場合

コミュニケーションへの態度

コミュニケーションへの憧れが強い ひきこもり

コミュニケーションを拒否して「自閉」 統合失調症

スチューデント・アパシーと退却神経症

回避性人格障害

境界性人格障害

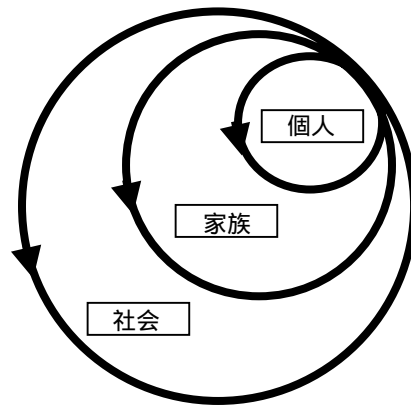
思春期妄想症

うつ病

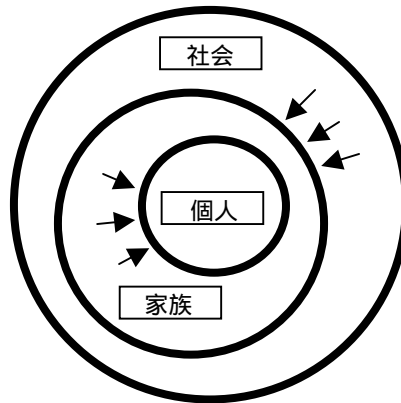
分裂病質人格障害

循環性気分障害

図1 ひきこもりシステム模式図

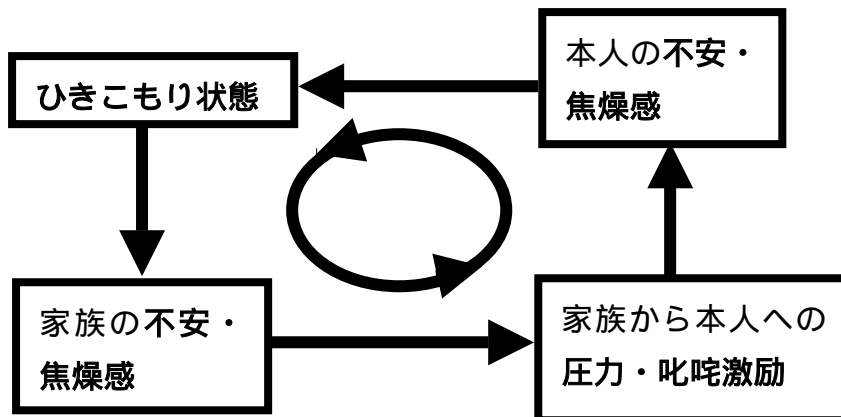


通常システム
 3つのシステムは相互に接しており、互いに影響を及ぼしあって作動を続けている。「接点」とはコミュニケーションのことである。



ひきこもりシステム
 3つのシステムは接点を失ってばらばらに乖離し、相互の働きかけはストレスに変換されて、いっそう乖離を促す。

図2 ひきこもりの悪循環模式図



社会的ひきこもりへの対応指針

治療全体の流れ

- (1) 家族指導（情報伝達）
- (2) 個人治療（精神療法、ときに薬物療法）
- (3) 集団適応（デイケア、たまり場、自助グループなど）

家族の基本的な心構え

本人が安心してひきこまれる環境づくり

覚悟と根気 信じて待つ

しつつけの発想をやめてみる 「怠け」「甘え」「わがまま」などは禁句

まず両親が一致団結する きょうだい、親戚には頼らない

北風より太陽 愛情より親切

振り回されない距離感 「友達の子どもを預かっている」

受容の枠組み設定（金銭管理は一定額に 暴力は徹底拒否）

犯人探しは禁物 親もプライベートを楽しむ 環境の変化は慎重に

依頼はまず丁寧に頼む、断られたらその場は引き下がる、あるいはやってみせる

コミュニケーションの回復

「会話」がすべて 相互性と共感性を大切に 断絶の場合はまず挨拶の励行から
うらおもてのない、わかりやすい態度で 「これみて悟れ」式は不適

本人からの訴えは、さえぎらずに最後まで聴き取る ただし「言いなり」は禁物

話す態度の問題：父親は尊大な権威者、母親は婉曲な皮肉屋になりがち

話題の選択：不自然さを恐れず、話したい態度を示す

将来、仕事、学校、過去の栄光、同級生の噂話、などは禁物

ニュース、スポーツ、芸能界など時事的なものは可 ペット、趣味、ギャンブル
インターネット

家庭内暴力への対処法

予防：退行させない＝スキンシップを禁じ、会話でおぎなう

初期：刺激せずに対話をこころがける 暴力に暴力で対抗しない！

慢性期：家庭の密室化 + 本人の退行 = 慢性的暴力

密室化の予防法：(1) 第三者の介入 (2) 司法（警察通報）の介入 (3) 避難

避難の三原則：(1) 暴力直後の避難 (2) 避難直後の連絡 (3) 帰宅のタイミング

ひきこもり不登校講演会のまとめ

11月24日 ひがしコミュニティーセンター AM10:00~12:00

参加者 117人+20~30人

(関係者 54人・一般 63人+20~30人(内54人市外))

講演内容 質疑応答 別紙資料

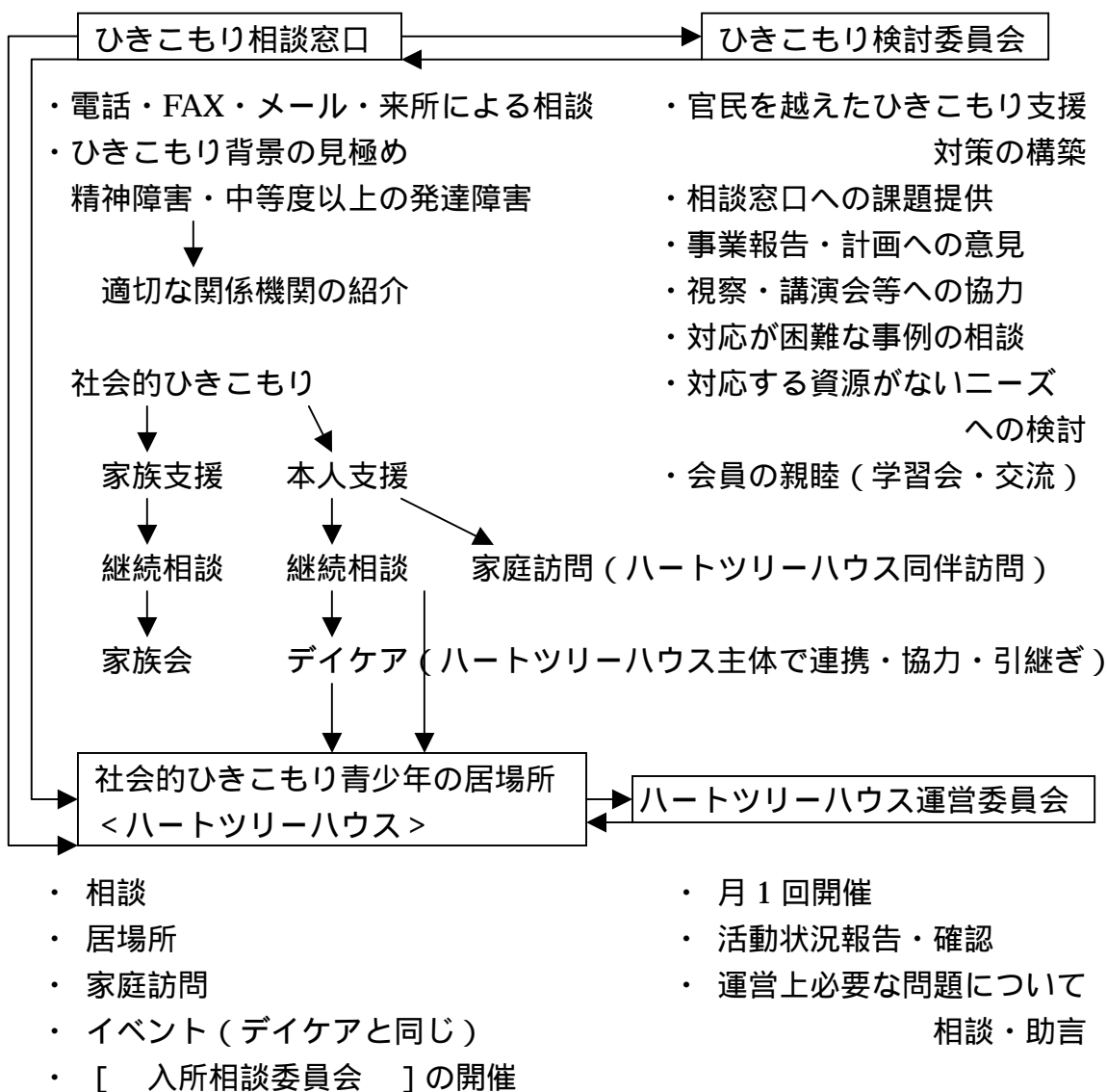
参加者の意見感想より

- ・ 面白く興味深く聴かせていただきましたが、残念ながら前日に参加できませんでしたので、一部わかりにくい話もあったように思いました。つくづく昨日行っておいたらよかったな—とっています。地域のネットワーク作りが現在個人的興味の中心となっていますので、そういった意味でも大変多くの示唆を得ることができました。ありがとうございました。
- ・ 具体的でとてもわかりやすかったです。何かをしようとエネルギーの沸いてくる会でした。ありがとうございます。
- ・ 先生お二人の熱のこもったお話に感動しました。いろいろ参考にさせられることばかりでした。今回の講演会に参加できてうれしく思います。本当にありがとうございました。
- ・ ひきこもりの父親です。大勢のスタッフ(お世話してくださる)の方々の丁寧な案内等、本当にありがとうございました。田辺市の姿勢に親として大変ありがたく思います。これからもいろいろなひきこもりに対する会を催していただきたい。
- ・ 大阪で登校拒否を克服する会で世話人を15年続けています。「ひきこもり」問題をどうとらえ、「会」としてどう取り組むかは、大阪でも大きな課題です。昨日「就労支援」は「就職支援」とは別物と聞き、この田辺市や和歌山市での取り組みの一端は知りました。それにしても困難な課題に正面から取り組んでいる皆さんに心から敬意を表します。今日は、「自立」をめぐる課題を掘り下げて一緒に勉強できてとてもよかったです。
- ・ 田辺保健所で実習しています保健師の学生です。治療と支援の違いについて印象に残っています。先生方の話にもありましたように、治療にはマニュアルが必要ですが、支援にはいろいろな方法論があります。それぞれの立場の違いでいろいろな拠点があると知りました。また保健師は治療と支援の間にあると思います。
- ・ 本日講演会に参加して、いろいろお話を聞かせていただきましてありがとう

ございました。不登校親の会へも一度行かせてもらったり、保健所にも相談に行きましたが、今は病院に行き薬をもらっている状況です。一度相談に行かせてもらいたいです。よろしくお願いします。

- ・ 昨日・本日2度、不登校ひきこもり講演に参加をはじめてさせていただき、会場に行って大勢の方々に出会い驚きました。私の場合は 才の男子の「ひきこもり」で悩んでいます。田辺市がこのような取り組みに進んでやられていることも存じませんでした。大変うれしく思いました。講演内容もわかりやすいし、大切な資料、メモ、本も買って良い勉強ができました。関係者の方々に感謝いたしております。今後ともご指導のほどをお願いいたします。

< 田辺市ひきこもり支援の体系 >



入所相談委員会に、相談窓口の担当者は依頼されて出席する。

入所相談委員会では、以下のことについて実施する。

- * 窓口相談・HTH見学等を経た方の入所及び対応についての相談
- * 入所者に関する相談
- * 入所者に関する経過報告
- * 必要に応じた家族面談

田辺市ひきこもり検討委員会・小委員会開催状況

(平成14年度)

平成14年度

- | | |
|-------------|---|
| 平成14年 4月22日 | 平成14年度第1回ひきこもり検討小委員会 |
| | <ul style="list-style-type: none">・ 相談窓口の実績の出し方について・ 教委との話し合いについて・ 家族会について・ タメ塾との話し合いの結果について |
| 平成14年 5月27日 | 平成14年度ひきこもり検討委員会 |
| | <ul style="list-style-type: none">・ 「田辺市ひきこもり検討委員会1年間の歩み」について・ 社会的ひきこもり家族会の設立について・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラムについて・ 事例紹介・ 予算について・ 社会的ひきこもり青少年居場所について |
| 平成14年 6月26日 | 平成14年度第2回ひきこもり検討小委員会 |
| | <ul style="list-style-type: none">・ 教委との話し合いの結果について・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラム実行委員会の決定事項確認・ 斎藤環氏講演会について・ 家族会の状況について・ 居場所について・ 今年度予算について・ 田辺市ひきこもり検討委員設置要綱について・ 国会衆議院資料について |
| 平成14年 8月28日 | 平成14年度第3回ひきこもり検討小委員会 |
| | <ul style="list-style-type: none">・ 今年度予算について |

- ・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラム実行委員会の決定事項確認
- ・ ひきこもり講演会について
- ・ 視察について
- ・ 家族会の状況について
- ・ 居場所に紹介した事例の様子について
- ・ 相談実績の出し方について
- ・ 事例紹介

平成14年10月 3～5日 北海道視察

平成14年10月31日 富田富士也氏講演会（ハートツリーハウス後援）

平成14年11月 7日 平成14年度第4回ひきこもり検討小委員会

- ・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラム実行委員会の決定事項確認
- ・ ひきこもり講演会について
- ・ 視察について
- ・ 家族会の状況について
- ・ 居場所に紹介した事例の様子について
- ・ 相談実績の出し方について
- ・ 事例紹介

平成14年11月13日 平成14年度第2回ひきこもり検討委員会

- ・ 本年度予算経過報告
- ・ 社会的ひきこもり青少年の居場所の活動について
- ・ 社会的ひきこもり家族会の状況について
- ・ 半期の実績
- ・ 視察報告
- ・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラムについて
- ・ ひきこもり講演会について
- ・ 実績の出し方
- ・ 今後の課題
- ・ ひきこもり相談窓口支援の流れ

- | | |
|-------------|--|
| 平成14年11月23日 | 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラム |
| 平成14年11月24日 | 不登校・ひきこもり講演会（斎藤環氏・工藤定次氏） |
| 平成14年11月24日 | 斎藤環氏参加の家族会（ハートツリーハウスにて） |
| 平成14年12月25日 | 平成14年度第5回ひきこもり検討小委員会
・ 青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラムのまとめ
・ ひきこもり講演会のまとめ
・ 斎藤環氏参加の家族会について
・ 今後の課題について
・ ひきこもり相談窓口支援の流れ
・ 事例紹介 |
| 平成15年 2月27日 | 平成14年度第6回ひきこもり検討小委員会
・ ひきこもり相談窓口の実態について
家族会・デイケア・家庭訪問
・ 居場所との連携
入所相談
・ ひきこもり相談窓口の問題点について
・ 事例紹介 |

その他

青少年就労支援「育て上げ」ネット近畿地区フォーラム実行委員会 6回開催

田辺市「ひきこもり」検討委員会(平成14年度)

委員	氏名	所属
	寺沢 啓三	社会福祉法人やおき福祉会
	谷 真美子	社会福祉法人やおき福祉会
	中地 雅子	社会福祉法人やおき福祉会
	柳瀬 敏夫	社会福祉法人やおき福祉会
	坂本 直史	社会福祉法人やおき福祉会
	北山 守典	社会福祉法人やおき福祉会
	米川 徳昭	社会福祉法人ふたば福祉会
	柳田 利徳	紀南総合病院新庄別館
	宮本 聡	紀南総合病院新庄別館
	西田 孝道	南紀高校教諭
	酒井 滋子	知識経験のある者
	平谷 芳子	知識経験のある者
	西川 誠	知識経験のある者
	濱中 ヒロ子	田辺市母子保健推進員
	安川 友加里	田辺保健所
	日下 訓士	紀南児童相談所
	大倉 久美子	西牟婁地方教育事務所(田辺市教育研究所)
	中本 克彦	田辺青少年補導センター
	塩本 幹子	福祉課
	南 俊秀	学校教育課
	谷本 敬介	社会教育課
	小郷 彰豊	社会教育課
	道畑 佳憲	生涯学習課
	目良 宣子	健康増進課

事務局 健康増進課

24名

田辺市「ひきこもり」検討小委員会(平成14年度)

委員	氏名	所属
委員長	宮本 聡	紀南総合病院新庄別館
副委員長	柳瀬 敏夫	社会福祉法人やおき福祉会
	寺沢 啓三	社会福祉法人やおき福祉会
	米川 徳昭	社会福祉法人ふたば福祉会
	西田 孝道	南紀高校教諭
	酒井 滋子	知識経験のある者
	安川 友加里	田辺保健所
	南 俊秀	学校教育課
	道畑 佳憲	生涯学習課
	目良 宣子	健康増進課

事務局 健康増進課

10名

参 考 資 料

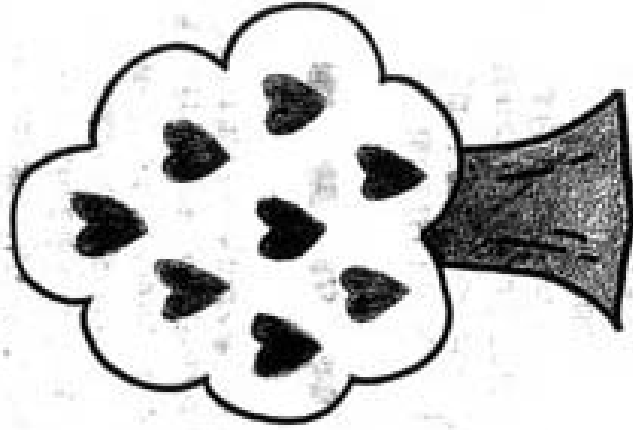
ひきこもり青少年の居場所に関する資料 4 7

不登校に関する居場所の資料 4 9

社会的ひきこもり青少年の居場所

ハートツリーハウス

～Heart Tree House～



since 2002

連絡先

T 846-0038
和歌山県田辺市末広町8-23
Tel&Fax 0739(25)8308

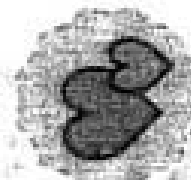
ハートツリーハウス運営委員会

地図



Heart Tree House...

木々が地に根をやし
枝の1本1本が広が
豊かに実ること
大きくなっていく...
そんな風にも育ってほしい...





相 談

一人(家族)で悩んでいても解決しないこと
 どうすればよいのか分からないこと
 誰かに話を聞いてもらいたいこと等
 このような悩みを抱えているのなら
 遠慮なくご相談ください
 一緒にどうしたらいいのだろうかを
 考えて行くことで、少しでも気持ちが楽に
 なっていく手助けが出来ればと考えています



居 場 所

外へ一歩踏み出してみたいけど
 どこへ行ったらいいのだろうか？
 誰かと話をしたいのだけれど
 どこに行けばいいのだろうか？
 そんな時に気軽に立ち寄れる空間です
 ゆっくりと過ごしながら
 少しずつ社会と関わっていきける場所…
 何かしてみたいという思いを実現する
 きっかけとなる場所になって欲しいと
 願っています。

家 庭 訪 問

誰かと話したい
 誰かに聞いてもらいたい
 けれど家から一歩出ること
 まだまだ不安が大きい…
 そんな方への訪問を
 行っています



イ ベ ン ト

外へ出てみることで
 ずこーし力が湧いたら
 何か活動してみませんか？
 料理・茶話会・スポーツ…
 内容は一緒に決めましょう
 もちろん参加は自由です



★ 利用対象

「ひきこもり」状態にある青少年

★ 対象年齢

15歳～30歳代までの男女

★ 費用

- ・入会金 なし
 - ・会費(1ヶ月) 5,000円
 - ・利用料(1日) 300円
 - ・イベント(1回) 500円
- (別途 実費を頂きます)
- ・家庭訪問(1回:約1時間) 5,000円
- (田辺市外の方はプラス2,000円です)

※ 見学のみのみも可能です

★ 開所時間

月曜日～金曜日 13:00～17:00
 (水曜日は

田辺市民総合センター女性ルームで
 開所しています)



LEAF STATION

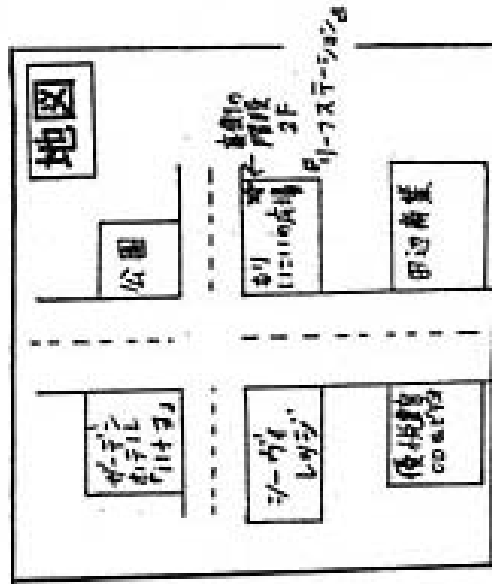
いろいろな形や色の葉っぱが集まると、木にはいろいろな種類があると分かる。同じ種類の木ばかり植えていると、虫や動物のえさが無くなって生態系が壊れてしまう。にんげんだっていろいろなほうがいいよね。お互いを認めあえば、少しずつ心は育っていくよ。そんな葉っぱたちの立ち寄る駅

リーフステーション
～ 葉っぱの駅～

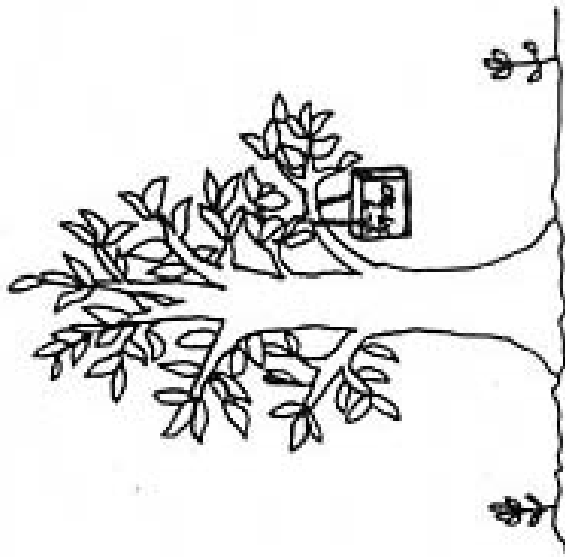
リーフステーション
でんわ(開設時間のみ)
0739-25-7381

郵便物や時間外の連絡は下記へ
〒946-0023
田辺市文里二丁目21-7 知野方
リーフステーション
でんわ:0739-25-1409(5の)

リーフステーション 所在
田辺市文里二丁目32-56
文里いこいの広場2F



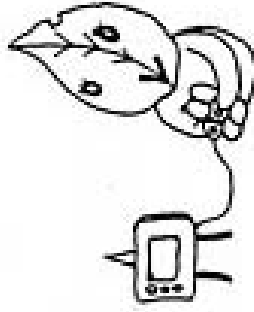
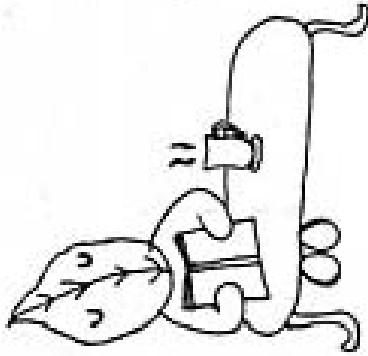
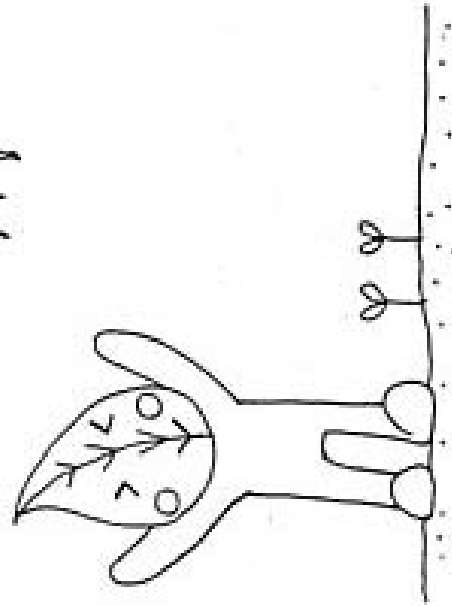
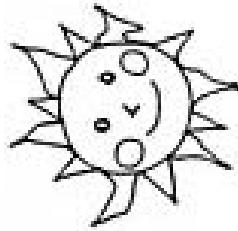
不登校の子どものための居場所
リーフステーション
～LEAF STATION～



since 2002

～居場所～

外出はできるけど、学校へは
まだ行きたくない、行けない、
本当は、友達としゃべったり
遊んだりしたいけど…
どうしたらいいのか分からない。
同じ気持ちの友達と仲良く
なりたい。
このような子どもたちが安心して
来れる場所になればいいなと
願っています。



リーフステーションでは、
いつ来ても、いつ帰っても
どんな格好で来ても…
自分のしたい事(ゲームをしたり、
本を読んだり、おしゃべりしたり)
をして、楽しい時間を過ごして
もらえたら、いいなと思っています。

★ 利用対象

・登校拒否、不登校の子ども通の中で、
外出はできるが、まだ学校に行けない
小学生・中学生・高校生。

★ 利用料

・運営協力費(1か月) 7000円

・利用料(1日) 300円

※最初の1回は、『見学』として、無料です。
(ただし、初回でも行事の時は、実費を頂きます！)

★ 開設時間

・午後1時から午後4時まで。

・毎週3日間(祝日は休み)

・月曜日

・水曜日

・金曜日

